

正史を訪れる

Part I 古代以前

一章 縄文

森隆一



火焰土器 (Wikipedia「縄文土器」より)

はじめに

倭の東遷は時代的には古墳時代に当たる。この前は弥生時代で、その前は縄文時代、さらにその前は旧石器時代となっている。ここでは使用している道具により区別されている。古墳時代の後は飛鳥時代(・藤原時代)・奈良時代・平安時代・・・と続いている。奈良時代を平城時代とも言ったと記憶しているが、平安との対比からは平城のほうが適していると思われる。

振り返ってみれば、縄文についての系統的な知識はない。もちろん、前稿 12 章で縄文海進を取り上げたので、これについてはある程度知っているが、縄文土器については、文章にできるほどの知識はない。関連する用語としてすぐに挙げられるものは、古くから知っている、尖石遺跡・火焰土器程度である。

1970 年頃尖石遺跡を訪れた。茅野からバスに乗り、ハヶ岳の裾野の集落でおり、畑の中をトボトボ歩いて辿り着いた程度の記憶しかない。現地には復元住宅があり、近くに小さい出土品を置いた程度の建物(名前は忘れた)があった。Google Map からは「[茅野市尖石縄文考古館](#)」という施設が建てられている。

縄文土器に関しては、尖石遺跡で見たはずであるが、全く記憶に残っていない。10年ほど前に、『みほミュージアム』で幾つかのものを見たことを思えているが、詳細は不確かである。縄文土器に関しては膨大な研究が行われていて、これらを理解することは出来そうにない。

本稿では、これらを取り込む準備ができればいいと思っている。

ここで、現代人の起原について、Wikipedia「ホモ・サピエンス」進化の記事を引用する。

ヒト属とチンパンジーの共通祖先が分岐したのはおよそ200万-1,000万年前、ホモ・サピエンスとホモ・エレクトスの共通祖先が分岐したのはおよそ20万-180万年前と見られている。

現生人類はホモ・サピエンス種である。そして、そのうち唯一現存する亜種はホモ・サピエンス・サピエンスとして知られる。他の既知の亜種であるホモ・サピエンス・イダルトゥはすでに絶滅している。一時期、ホモ・サピエンス・ネアンデルターレンシスと呼ばれて亜種に分類されていたネアンデルタール人は3万年前に絶滅している。

分子生物学の研究結果からすべての現生人類がおよそ20万年前のアフリカ人祖先集団に由来するとした証拠が示されているが、それより10万年ほども古い化石が発見されたことで、今後のさらなる研究が待たれる。アフリカ人の遺伝的多様性

に関する広範な研究から、14の「祖先集団クラスター」に由来するサンプリングされた113の様々な集団のうち、サン人の遺伝的多様性が最も高いことが判明している。また、この研究報告は南西アフリカのナミビアとアンゴラの沿岸境界近くが現生人類の移動の起点だとしている。

直近1万5000年のゲノムを解析した結果、ヒト個体群の自然淘汰が現在も作用を続けていることが判明している。

1.1. 縄文時代

まずは、Wikipediaの記事を眺めてみる。

Wikipedia「縄文時代」の冒頭は、

縄文時代は、日本列島における時代区分の一つである。旧石器時代の後に当たり、世界史では中石器時代ないしは、新石器時代に相当する時代である。旧石器時代（非定住狩猟採集社会）と縄文時代の違いとしては、土器と弓矢の使用、磨製石器の発達、定住化の始まりと竪穴建物の普及、環状集落等の定住集落や貝塚の形成、植物栽培(半栽培)の始まりなどが挙げられる。

である。

ここで、Wikipedia「石器時代」からは

旧石器時代：200 万年前から1万 2000 年前の間

中石器時代：1万 2000 年前～1万年前ないし 8000 年前頃の期間

新石器時代：オリエントの三日月地帯では1万年前頃から

：中米やメソポタミアでは 8000 年前頃から

である。

ここでの疑問は、新石器時代と言わずに、縄文時代ということの意義が定かでない。Wikipedia「岩宿遺跡」から、‘1946年(昭和21年)頃、相沢忠洋によって発見’されたことから、日本での旧石器時代の存在が確

認された。

“旧石器時代人と縄文時代人は関係ないとされている”ということ、どこで見たか忘れたが、記憶している。

Wikipedia「旧石器時代の遺跡一覧」、「縄文時代の遺跡一覧」、「弥生時代の遺跡一覧」では所在地などのデータも書かれているが、都道府県別の個数を表にしてみる。

表 1.1. 旧石器・縄文・弥生の遺跡数

各時代の遺跡の個数				都道府県名			旧石器	縄文	弥生						
北海道	13	15	2	青森	3	7	2	岩手	4	7	1	秋田	2	12	6
宮城	3	12	4	山形	3	6	2	福島	2	6	2				
茨城	3	4	1	栃木	5	4	1	群馬	8	13	5	埼玉	14	29	19
千葉	8	10	4	東京	19	27	7	神奈川	10	25	8				
新潟	7	15	4	富山	3	4	1	石川	1	7	1	福井	2	2	1
山梨	5	13	7	長野	14	16	4	岐阜	1	5	1	静岡	8	13	1
愛知	3	10	3	三重	1	5	1								
滋賀	2	13	6	京都	3	7	1	大阪	8	27	3	兵庫	6	12	4
奈良	5	13	3	和歌山	2	9	1								
鳥取	3	2	6	島根	2	4	4	岡山	3	11	5	広島	3	2	2
山口	2	4	1	徳島	3	4	1	香川	1	2	1	愛媛	3	3	0
高知	2	4	0												
福岡	2	7	7	佐賀	6	3	2	長崎	12	14	6	熊本	6	6	8
大分	4	4	1	宮崎	4	4	2	鹿児島	7	6	1	沖縄	5	6	3
全国	236	437	149	822											

「旧石器時代の遺跡一覧」では、わかっている発見年と初調査年が書

かされている。このなかで、1990 年以降に初調査が行われたものがかなり含まれている。

上記の遺跡を地図にプロットしたらいいと思うが、手間を考え保留としておく。

表 1.1 で 3 つの時代の遺跡の総数はおおよそ 800 で、旧石器・縄文・弥生の比は訳 3 : 6 : 2 となっている。弥生時代には、稲の栽培と鉄器の使用が始まったことにより生産が増えたということになっている。これと遺跡数の減少は矛盾しているようにも見える。これに対しては、2 つのことが考えられる。

1 つは、低地の平野においては、少人数で分散するよりも、冊などのある程度の防衛施設をもった所に集団で暮らす方が有利であったと考えられることが考えられる。もう 1 つは、弥生人に適した土地は、後世の人にも適していたため、その遺構は破壊され上に後世の建物が造られたことである。

個別には、埼玉の 14, 29, 19 の数字が気になることを指摘しておく。埼玉県は東京都と併せて武蔵国を形成していた。これに神奈川を加えた合計は 43, 81, 34 となる。‘縄文は北日本、弥生は南日本’と覚えている。その後、これは本当だろうかと思った。上の一覧で、埼玉・東京・神奈川・大阪が 20 以上となっている。縄文遺跡数の数で埼玉・東京・神

奈川合計81は東北6県の合計51より6割も多い。弥生人や古代人現代人に住みやすいとことは、縄文人にとっても住みやすい所であるはずだと考えたが、合っているかもしれない。

もう一つ気になるのは、縄文と弥生の比が、島根・広島・福岡が1:1で、熊本が3:4となっていることである。

公益財団法人 向日市埋蔵文化財センター > 「[弥生時代の遺跡一覧表](#)」では20件が記載されている。また、大東市 > 「[遺跡一覧](#)」では、弥生単独が3件、弥生に始まるもの14件、弥生を含むもの5件の22件が報告されている。これだけで表1.1に書かれている両府の遺跡数をそれぞれ越えてしまうことになる。

Wikipedia「縄文時代」から縄文時代の時代区分を抜き出してみた。

表 1.2. 縄文時代の時代区分

草創期:	1万7000年前 - 1万1500年前
早期:	1万1500年前 - 7000年前
前期:	7000年前 - 5500年前
中期:	5500年前 - 4400年前
後記:	4400年前 - 3200年前
晩期:	3200年前 - 2400年前(東北・関東地方)

である

縄文時代は1万1500年前から3000年前まで、1万年以上続いたことに

なる。上の引用からは、オリエントの三日月地帯、中米やメソポタミアが新石器時代を向かえるのより早いということになる。

また、Wikipedia「縄文時代」から縄文時代の9つの文化圏も抜き出してみた。

石狩低地以東の北海道： エゾマツやトドマツといった針葉樹が優勢な地域。トチノキやクリが分布していない点も他地域との大きな違いである。トド、アザラシ、オットセイという寒流系の海獣が豊富であり、それらを捕獲する為の回転式離頭銛が発達した。

北海道西南部および東北北部： 石狩低地以東と異なり、植生が落葉樹林帯である。ミズナラ、コナラ、クルミ、クリ、トチノキといった堅果類の採集が盛んに行われた。回転式離頭銛による海獣捕獲も行われたが、カモシカやイノシシなどの陸上のほ乳類の狩猟も行った点に、石狩以東との違いがある。

東北南部： 動物性の食料としては陸上のニホンジカ、イノシシ、海からはカツオ、マグロ、サメ、イルカを主に利用した。前2者とは異なり、この文化圏の沖合は暖流が優越する為、寒流系の海獣狩猟は行われなかった。

関東： 照葉樹林帯の植物性食料と内湾性の漁労がこの文化圏の特徴である。陸上の動物性食料としてはシカとイノシシが中心。海からはハマグリ、アサリを採取した他、スズキやクロダイも多く食した。

北陸： シカ、イノシシ、ツキノワグマが主な狩猟対象であった。植生は落葉広葉樹（トチノキ、ナラ）で、豪雪地帯である為に家屋は大型化した。

東海・甲信： 狩猟対象はシカとイノシシで、植生は落葉広葉樹であるが、ヤマノイモやユリの根なども食用とした。打製石斧の使用も特徴の一つである。

近畿・伊勢湾沿岸・中国・四国・豊前・豊後： 狩猟対象はシカとイノシシで、植生は落葉広葉樹に照葉樹（シイ、カシ）も加わる。漁業面では切目石錘（石を加工して作った網用の錘）の使用が特徴であるが、これは関東の土器片による錘の技術が伝播して出現したと考えられている。

九州（豊前・豊後を除く）： 狩猟対象はシカとイノシシ。植生は照葉樹林帯。最大の特徴は九州島と朝鮮半島の間広がる多島海 を舞台とした外洋性の漁労活動で、西北九州（北松浦半島）型結合釣り針や石鋸が特徴的な漁具である。

トカラ列島以南： 植生は照葉樹林帯である。動物性タンパク質としてはウミガメやジュゴンを食用とする。珊瑚礁内での漁労も特徴であり、漁具としてはシャコガイやタカラガイなどの貝殻を網漁の錘に用いた。九州文化圏との交流もあった。

まずは、北陸が2カ所に書かれている。後者はミスであろう。

次に関東が照葉樹林帯というのは何かの勘違いか。筆者の抱く武蔵野の秋は落葉広葉樹林である。これに反して、近畿・伊勢湾沿岸・中国・四国・豊前・豊後の植生は落葉広葉樹に照葉樹も加わる。これは、関東

と逆ではないかと思えた。

Wikipediaで‘照葉樹’で検索したら、「照葉樹林」にとばされる。

ここでは、

照葉樹林とは、森林の群系の一種で、温帯に成立する常緑広葉樹林の一つの型を指す。構成樹種に葉の表面の照りが強い樹木が多いのでその名がある。

と説明されている。これから、‘照葉樹林’とは‘温帯常緑広葉樹林’ということになる。植物学的には広葉樹・針葉樹と分けられているようだ。さらに、広葉樹は落葉広葉樹と常緑広葉樹に分けられる。

照葉樹林については、中尾佐助の「照葉樹林文化—日本文化の深層」（中公新書 201、1986）をかって読んだが内容はほとんど覚えていない。

ここで、Wikipedia「照葉樹林文化論」の概要を引用する。

照葉樹林文化論を主に担ったのは中尾佐助、佐々木高明といった文化人類学者である。彼らは日本の生活文化の基盤をなす主要要素が中国雲南省を中心とする東亜半月弧に集中するとして、類似した文化の広がる地域を照葉樹林文化圏と名づけた。照葉樹林は西日本から台湾、華南、ブータン、ヒマラヤに広がる植生である。この一帯には、人為攪乱によって照葉樹以外の植生となっているところが多いが、気候条件からみると照葉樹林が成立しうる。この地域に住む民族の文化要素には、森林や山岳と良く結びついたものが多い。長江文明は長江流域の沼沢地等の低平湿

地に栄えた文明である。佐々木はさらに、西日本の照葉樹林文化に対応させるかたちで東日本にナラ林文化という概念を設定し、中国東北部や朝鮮半島に広がるモンゴリナラやブナ林の分布する地域にみられる文化要素との関連も示唆している。

具体的には、根栽類の水さらし利用、絹、焼畑農業、陸稻の栽培、モチ食、麴酒、納豆など発酵食品の利用、鶏飼い、漆器製作、歌垣、お歯黒、入れ墨、家屋の構造、服飾などが照葉樹林文化圏の特徴として挙げられる。照葉樹林文化論を肉付けする形で稲作文化や畑作文化なども考証されている。

栽培イネの発祥地は、一時、雲南地域とされたが、近年の考古学や分子生物学の知見は稲作が長江文明の湿地帯に始まった事を明らかにした。稲作文化の多くの要素は、後から照葉樹林文化の要素を包摂した。これを受け、佐々木高明は『日本文化の多重構造』において長江文明論を包摂しながら、自説を発展させた。佐々木は最近の総括のなかで、照葉樹林文化論を「未完の大仮説」とし、今後を展望している。鳥居・赤飯については各項目参照のこと。

中尾は農耕文化の4大体系から見て、照葉樹林文化圏が「ニジェール川上流域を発祥地とする、サバンナ系雑穀文化(稲入る)」の影響を受けた「マレー半島起源の、芋(ウビ)系文化の温帯発展型」であり、両方の農耕文化(なお、サバンナ系の代表作物に入る水生植物(レンコン等)は、アフリカの一部と照葉樹林文化圏しか栽培されない)から作物を受け取っているとする。

1.4 節での 3 段階渡来モデルと結び付けられれば、どちらも強化さるであろう。また、‘影響を受ける・与える’方法としては、征服・移住のように相当数の人の移動を伴うものと、人に移動がないものが考えられる。

また、“照葉樹林は西日本から台湾、華南、ブータン、ヒマラヤに広がる植生である。”とされていることは、縄文時代の 9 つの文化圏の記述とは異なる。すなわち、関東が照葉樹林帯で西日本が落葉広葉樹に照葉樹が加わるは、逆と考えるのが自然である。

京都の北山辺りがこの境い目になっている。紅葉するのはこの落葉広葉樹の落葉時に起きることである。筆者が‘全山紅葉す’と感じたのは、京都北山の佐々里峠と手取川ダム湖右岸である。これは、紅葉時に東北・上州・甲信越には行くことが困難であったことによる。

ブータン、ヒマラヤが含まれていることから、亜熱帯(高原)の常緑広葉樹林も照葉樹林も含めているようである。

1.2. 縄文土器

ここでも Wikipedia の記事を眺め、記事の冒頭の部分を選択引用する。この記事は半年前と比べてかなり更新されているようだ。

Wikipedia 「縄文土器」

縄文土器は、日本の石器時代(縄文時代)の土器の呼称。現在では滅多に使われていないが縄紋土器という表記もある。

概要: 縄目模様が特徴的だったので縄文土器と呼ばれるようになったが日本の石器時代の土器すべてに縄文が施されていたわけではない。日本の石器時代(縄文時代)の土器ならば縄目模様をほどこしていないものも含めて縄文土器と呼ぶ。北は北海道の礼文島や千島から南は奄美大島、沖縄の南西諸島にまで分布する。時代や地方ごとに独特の様式(形状と文様の組み合わせ)がある。時代ごとの流行や好みの変化が様式に反映されているので、様式の変遷を目安にして縄文時代の草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の6期に分類するということが行われている。

縄文土器と弥生土器の違い: 縄文の施されているという点もあるが、弥生土器は焼成温度が高く、縄文土器は温度が低い点にある。このため、縄文土器は壊れやすく、形状も厚く形成されている。そして、弥生土器は高温で焼かれたため、薄い赤褐色であるのに対し、縄文土器は褐色となる。

縄文土器の発見と定義：縄文土器は大森貝塚を発掘したモースによって見出され、英文報告書で cord marked pottery とされた。しかし貝塚土器など様々に呼ばれ、結局、縄目文様という発想から命名された縄文式土器の用語が定着した。1975年(昭和50年)、佐原真は土器の名称に式を使うことの不合理を説き、縄文土器の名称を使うことを提唱し、以後、一般化した。編年作業が精緻化した今日においては縄文土器の用語が用いられることが多く、その場合、縄文(縄目文様)が施された縄文時代の土器という狭義の縄文土器と縄文時代の土器一般という広義の縄文土器の2つの意味で用いられる。また、山内清男や佐原真など一部の研究者で縄紋土器の用語を用いているものもある。これは、土器表面に施された模様が一種の紋章の意味を成しているのではないか、という考えによるものである。

縄文土器の年代と東アジア：1万6000年前ころから土器が出土している。この土器は縄文が施されていないが、世界最古であり、当時は日本列島で土器が出来たとされていた。しかし、シベリアなどで同年代の土器が見つかり、東アジアに土器文化が広がっていった事が今ではわかっている。土器の年代は炭素14年代法で確定される。炭素年代法については異論がある。しかし、1万6000年前では、花粉などに気候の方法があるが、最後には同位体元素に戻り、他に有力な方法がない。

縄文土器の時代区分：草創期：約16,000年前、早期：約11,000年前、前期：約7,200年前、中期：約5,500年前、後期：約4,700年前、晩期：約3,400年前に

始まり、約 2950 年前に終わる。晩期から弥生時代への移行の様相は地域によって相当に異なる。

縄文土器の文化圏：各地でいくつかの文化圏に別れて離合集散を繰り返していたが、縄文後期には、ナラ林文化圏と照葉樹林文化圏に 2 分された。ナラ林文化圏のほうが、クリの利用など人口は多かった。クリは栽培種であり、その他の野菜や雑穀の農業も各地で行われていた。しかし、水田稲作は照葉樹林文化圏の北九州で起こった。

縄文土器と弥生土器との関係：水田稲作の始まった、縄文晩期末と弥生草創期は、重なる。それは、水田稲作開始時期の土器が縄文土器の形をしているが、水田稲作の開始に合わせ、文化と土器統一性を持たせるため縄文を施された縄文土器をも、弥生土器と定義するためである。

弥生草創期の縄文土器と弥生土器：弥生草創期の菜畑遺跡で出土した土器は、縄文を施された櫛目文突帯土器である。その中に 2, 3% 形は縄文土器だが、朝鮮半島の無文土器の作成技法を用いた土器が混じっていた。やがて、この作成技法が一般化し、遠賀川式の弥生土器が生まれる。この意味で、縄文土器は弥生土器の流れをくみ、朝鮮半島の無文土器の流れをも組んでいる。

始めの部分を引用したが、これ以上は消化不良を起こしそうなので、ここで終わることにして、興味ある 3 つの文を抜き出してみる。

👉 弥生土器は焼成温度が高く、縄文土器は温度が低い点にある。このため、縄文土器は壊れやすく、形状も厚く形成されている。そして、弥生土器は高温で焼かれたため、薄い赤褐色であるのに対し、縄文土器は褐色となる。

👉 1万6000年前ころから土器が出土している。この土器は縄文が施されていないが、世界最古であり、当時は日本列島で土器が出来たとされていた。しかし、シベリアなどで同年代の土器が見つかり、東アジアに土器文化が広がっていった事が今ではわかっている。

👉 弥生草創期の菜畑遺跡で出土した土器は、縄文を施された櫛目文突帯土器である。その中に2, 3%形は縄文土器だが、朝鮮半島の無文土器の作成技法を用いた土器が混じっていた。やがて、この作成技法が一般化し、遠賀川式の弥生土器が生まれる。

約6,500年前-約6,000年前にピークを迎えた縄文海進が縄文時代の時代区分どの位置となるかをみるつもりで調べてみた。

今までは、‘縄文土器を使っていた時代が縄文時代’と思ってきたが、これは広義の縄文土器とすれば正しく、狭義の縄文土器では間違っているようだ。筆者の高等学校時代は縄紋式土器と習った気がする。

縄紋式土器→縄紋土器→縄文土器と変化したのか、縄紋式土器→縄文土器と変化したのかはわからないが、広義の縄文土器の概念の定着と同じ時期であろう。縄紋→縄文の変化は文様ではなくなったことである。

感じとしては、“弥生時代以前の(中・)新石器時代を縄文時代とい

い、ここで作成された土器を縄文土器という”と理解しておく。なお、
[「縄紋から縄文への転換の実相」](#) 里見絢子’ を見つけた。

前節の縄文文化の時代区分と本節の縄文土器の時代区分を1つにして
みた。

表 1.3. 縄文時代と縄文土器の時代区分

縄文時代の時代区分	縄文土器の時代区分
草創期：1万7000年前 - 1万1500年前	約16,000年前 - 約11,000年前
早期：1万1500年前 - 7000年前	約11,000年前 - 約7,200年前
前期：7000年前 - 5500年前	約7,200年前 - 約5,500年前
中期：5500年前 - 4400年前	約5,500年前 - 約4,700年前
後期：4400年前 - 3200年前	約4,700年前 - 約3,400年前
晩期：3200年前 - 2400年前 (東北・関東地方)	約3,400年前 - 約2950年前

この対照表から、縄文文化と縄文土器の時代区分はほぼ同じとみてよ
いと思われる。

最後の縄文晩期の終わりだけ、約2950年前と十の位が0でない。

ここまでで感じた疑問点の幾つかを以下に列挙することにする。

👉 縄文人(新石器人)はどのように土器製作を得たのか。

👉 縄目模様の縄文土器はどの時期に出現したのか。また、この縄の材料は何か。

👉 草創期から晩期まで1万5千年ほどあるが、単一の縄文人であったのか。(%% 章末か)

1.3. 放射性炭素年代測定

学生時代に読んだ本では放射性炭素による年代測定は取り挙げられていなかったと記憶している。いつ頃からか、参考程度に記載されるようになった。

Wikipedia「放射性炭素年代測定」の記事から歴史を引用する。

1939年、バークレー放射線研究所のマーティン・ケイメンとサミュエル・ルーベンは、同研究所のサイクロトロン加速器によって ^{14}C を生成し、その半減期が当時考えられていたよりはるかに長いことを見出した。続いてフィラデルフィアのフランクリン研究所に所属していたサージ・A・コルフが高層大気中で ^{14}N と熱中性子の反応により ^{14}C が生成すると予想した。リビーは1945年にシカゴ大学へ移って放射性炭素年代測定の研究開発を始めた。結果をまとめた論文は1947年に『サイエンス』誌に掲載された。

リビーとジェームズ・R・アーノルドは放射性炭素年代測定のアイデアを検証するために年代が判明している試料の分析を始めた。例として、エジプト王ジェセルとスネフェルの墳墓から出土した紀元前 2625 ± 75 年と同定されている二つの試料に放射性炭素年代測定を行ったところ、平均で紀元前 2800 ± 250 年という結果が得られた。この結果は1949年12月に『サイエンス』誌に掲載された。

Wikipedia「放射性炭素年代測定」の記事から日本での実例を引用する。

日本の試料で初期に測定された例として、千葉市花見川区朝日ヶ丘町にある東京大学検見川総合運動場の落合遺跡で発掘された丸木舟がある。大賀ハスで知られている大賀一郎は年代を明確にするため、ハスの実の上方層で発掘された丸木舟のカヤの木の破片をシカゴ大学原子核研究所へ送り年代測定を依頼した。シカゴ大学のウィラード・リビーらによって放射性炭素年代測定が行われ、3075年 ±180年前のものとした。

1950年・1955年に調査された夏島貝塚の縄文時代早期の層から出土したカキ殻と木炭がある。1959年3月と6月に、ミシガン大学から杉原荘介に、炭素14年代法による年代値は、貝殻 BP9450 ±400 と木炭 BP9240 ±500 であったことが報告された。この結果、縄文時代早期は9500年前と初めて測定され縄文土器が世界最古の土器文化である可能性が指摘された。これは日本の考古学者の多くを驚愕させた。また、測定を依頼した芹沢長介らと、大陸で出土した遺物の年代から3000年前と主張する山内清男との間で論争が起きている。

青森県東津軽郡外ヶ浜町の大平山元 I 遺跡の縄文時代草創期の土器製作時期が、通説より4500年も古い1万6500年前と1999年4月に発表された。

また、弥生時代の開始期は通説では紀元前 5 - 紀元前 4 世紀ごろであったが、2003 年 3 月の国立歴史民俗博物館の発表では約 500 年古い約 3000 年前に遡る結果が出た。

株式会社加速器分析研究所「[放射性炭素年代測定](#)」の説明がわかり易い。

放射性炭素年代測定の概要：自然界には、重さの違う 3 種の炭素同位体 (^{12}C , ^{13}C , ^{14}C) が存在します。このうち ^{14}C は放射性同位体と呼ばれ、地球上に絶え間なく降り注ぐ宇宙線が大気中で原子核反応をして作られる一方、半減期 5730 年で放射壊変により減少していきます (5730 年で半分に減少します)。こうして生成量と減少量がつりあい、環境中の ^{14}C 濃度は一定となります。このとき炭素の割合は

$$^{12}\text{C} : ^{13}\text{C} : ^{14}\text{C} = 0.99 : 0.01 : 1.2 \times (10^{-12} \text{ 乗})$$

となっており、 ^{14}C は通常の (^{12}C) 炭素の約 1 兆分の 1 の割合で現在の自然界に存在しています。

動植物が死んでしまうと、体内に取り込まれていた ^{12}C と ^{13}C は安定しているのに対して、 ^{14}C は新たに補充されることないため、半減期に従って時間の経過とともに一定の割合で減少します。この ^{14}C が規則的に減少するという性質が正確に時を刻む時計の役割を果たし、これを利用して年代測定を行なうことができるというのが放射性炭素年代測定法です。

放射性炭素年代測定の結果は‘ $○○ \pm \Delta\Delta$ ’と表示されている。これは、放射壊変はランダムな現象で指数分布に従うことによるはずで、統計処理に基づく閣下のはずである。

1.4. DNA 解析

分子遺伝学という分野がある。Wikipedia「分子遺伝学」では

分子遺伝学(molecular genetics)は生物学の研究分野であるが、二つの異なる分野を指す。塩基配列の比較から生物の進化を議論する分野と、遺伝現象の仕組みを分子のレベルで理解しようとする分野である。

(前者について) 遺伝情報として生物が有する DNA や RNA は、種の進化とともに変化する。この変化を観察することである生物種(やウイルス等の非生物も)がどのように分化したかを調べる。形態的な分類による古典的な分類学に対し、塩基配列や酵素多型と行った遺伝情報から分類する。理論的な体系は、木村資生の中立進化説により確立された。現在でも中立説は遺伝子進化を解析する際に非常に重要な理論的基盤を提供している。この分野は、分子進化学、あるいは分子系統学(系統学の一分野として)、分子分類学(分類学の一分野として)などとも呼ばれる。

(後者について) 遺伝情報を記述する遺伝子の化学的本体が DNA であり、その塩基配列によって蛋白質の構造が記述されていることが明らかとなっている今日では、遺伝学や分子生物学、あるいは遺伝子工学において用いられる基本的かつ重要な手法となっている。

Google で ‘DNA 解析’ を検索したら、ヒットしたものに DNA 解析とい

う用語は殆どなく、かわりに‘ゲノム解析’が用いられている。

核 DNA 解析が確立したのは最近である。進化の解明から、移動の推測も可能となり、日本列島への人の移動が解析できるようになった。新しい分野であり、平易な文献は少ない。

＊ [「yomiuru online:深読みチャンネル:2017年12月15日 05時20分」](#)

では、

日本人のルーツの一つ縄文人は、きわめて古い時代に他のアジア人集団から分かれ、独自に進化した特異な集団だったことが、国立遺伝学研究所(静岡県三島市)の齋藤 成也 教授らのグループによる縄文人の核 DNA 解析の結果、わかった。

現代日本人(東京周辺)は、遺伝情報の約 12%を縄文人から受け継いでいることも明らかになった。縄文人とは何者なのか。日本人の成り立ちをめぐる研究の現状はどうなっているのか。核 DNA 解析でたどる日本人の源流(河出書房新社)を出版した齋藤教授に聞いた。

20 万年前にアフリカで誕生した現生人類(ホモ・サピエンス)は、7 万~8 万年前に故郷・アフリカを離れ、世界各地へと広がっていった。西に向かったのがヨーロッパ人の祖先、東に向かったのがアジア人やオーストラリア先住民・アボリジニらの祖先となった。

縄文人は、東に向かった人類集団の中でどういう位置づけにあるのか。「最初に

分かれたのは、現在、オーストラリアに住むアボリジニとパプアニューギニアの人たちの祖先です。その次が、縄文人の祖先だと考えられます。しかし、縄文人の祖先がどこで生まれ、どうやって日本列島にたどり着いたのか、まったくわかりません。」

アフリカを出た人類集団が日本列島に到達するには内陸ルートと海沿いルートが考えられるが、縄文人の祖先はどのルートを通った可能性があるのだろうか。「海沿いのルートを考えています。大陸を海伝いに東へ進めば、必ずどこかにたどり着く。陸地に怖い獣がいれば、筏で海へ逃げればいい。海には魚がいるし、食料にも困らない。一つの集団の規模は、現在の採集狩猟民の例などを参考にすると、100人とか150人ぐらいではなかったかと思います」と斎藤教授は推測する。

「遺伝的に近かった出雲人と東北人」

数年前、島根県の出雲地方出身者でつくる東京いずもふるさと会から国立遺伝学研究所にDNAの調査依頼があり、斎藤教授の研究室が担当した。21人から血液を採取してDNAを抽出、データ解析した。その結果、関東地方の人たちのほうが出雲地方の人たちよりも大陸の人びとに遺伝的に近く、出雲地方の人たちは東北地方の人たちと似ていることがわかった。

衝撃的な結果でした。出雲の人たちと東北の人たちが、遺伝的に少し似ていたのです。すぐに、東北弁とよく似た出雲方言が事件解明のカギを握る松本清張の小説

砂の器を思い出しました。DNA でも、出雲と東北の類似がある可能性が出てきた。昔から中央軸(九州北部から山陽、近畿、東海、関東を結ぶ地域)に人が集まり、それに沿って人が動いている。日本列島人の中にも周辺と中央があるのは否定できない、と指摘。出雲も東北地方も同じ周辺部であり、斎藤教授はうちなる二重構造と呼んで、注目している。その後、新たに45人の出雲地方人のDNAを調べたが、ほぼ同じ結果が得られたという。

「日本列島への渡来の波、2回ではなく3回?」

斎藤教授は、このうちなる二重構造をふまえた日本列島への三段階渡来モデルを提唱している。第1段階(第1波)が後期旧石器時代から縄文時代の中期まで、第2段階(第2波)が縄文時代の後晩期、第3段階(第3波)は前半が弥生時代、後半が古墳時代以降というものだ。第1波は縄文人の祖先か、縄文人。第2波の渡来民は海の民だった可能性があり、日本語の祖語をもたらした人たちではないか。第3波は弥生時代以降と考えているが、7世紀後半に白村江の戦いで百済が滅亡し、大勢の人たちが日本に移ってきた。そうした人たちが第3波かもしれないと語る。

このモデルが新しいのは、二重構造モデルでは弥生時代以降に一つと考えていた新しい渡来人の波を、第2波と第3波の二つに分けたことだという。この二つの渡来の波があったためにうちなる二重構造が存在している、と斎藤教授は説く。

ここで、“縄文人は、きわめて古い時代に他のアジア人集団から分かれ、独自に進化した特異な集団だった。”の独自は、旧石器時代人と縄文人は関係ないとも言っているようだ。とすれば、旧石器時代人はどのようにして滅んだのか。

また、“現代日本人(東京周辺)は、遺伝情報の約 12%を縄文人から受け継いでいる。”東京周辺がどの程度かはわからないが、現代日本人とするには、山手線周辺を除く 23 区などが考えられる。

残りの 88%は誰から受け継いだのか。弥生人から受け継いでいる以外に考えられない。ただし、遺伝的近似性と文化的近似性は必ずしも一致するとは限らないであろう。アメリカのある国出身者の集団と彼らの出身地の終段とを比較することで何かが得られるかもしれない。‘約 12%を縄文人から受け継いでいる’の意味も曖昧さが残る。縄文人の遺伝情報を J 弥生人の遺伝譲歩を Y とするとき、J であって Y にないものの 12%であろうが、少ないような気もする。Y であって J でないものは 88%なのであるか。さらには、J と Y に共通なものの割合はどの程度であろうかなどの疑問となる。

以下で、DNA 分析に関して目にとまったウェブ・ページを挙げていく。

* Wikipedia「日本人」では、DNA 分析の結果も取り入れられている。

これは 6 系統→ 6.1 分子人類学による説明 に書かれているが、かなり長い。

＊ [「日本人はどこから来たのか？ ～MYCODE セミナー「ミトコンドリア DNA でたどる日本人のルーツ」【レポート】」](#)

＊ [「ヤポネシアン ゼロ巻ゼロ号 新学術領域研究ヤポネシアゲノム季刊誌」](#)

＊ 科学研究費助成事業 研究成果報告書

[「全ゲノム解析法を用いた縄文人と渡来系弥生人の関係の解明」](#)の

4. 研究成果(まとめ)は興味あるが、読み砕くのは難しい。

＊ [「ゲノムから読み解く日本人の起源 斎藤成也」](#) (パワー・ポイント)

講演におけるパワー・ポイント画像を公開したものであり、説明なしで理解することは難しい。

次の 2 つは動画である。大まかな理解にはこちらのほうが有効と考える。

＊ [「未来を創る科学者達 \(6\) 遺伝子に隠された日本人の起源 ～篠田謙一～」](#)

＊ [「中国人・韓国人と、日本人の DNA の違い」](#)

最後は書籍である。

* 斎藤成也「DNA から見た日本人」ちくま新書、2005（絶版）

* 斎藤成也「日本人の源流」河出書房新社 2018

1.5. 縄文海進・弥生海退・平安海進

‘正史を彷徨う’では弥生海退・平安海進を考慮しなかった(出来なかった)。

まずは、前稿 12 章で引用した縄文海進の記事から利用できそうな部分を主に抜き出していく。

Wikipedia「縄文海進」では

縄文海進は、縄文時代に日本で発生した海水面の上昇のことである。約 6,500 年前-約 6,000 年前にピークを迎え、ピーク時の海面は現在より約 5m 高く、気候は現在より温暖・湿潤で平均気温が 1-2℃高かった。

この時期は最終氷期終了の後に起きた世界的に温暖化の時期に相当する(完新世の気候最温暖期)。また、北半球の氷床が完新世では最も多く融けていたため、世界的に海水準が高くなった時期に当たる。この温暖化の原因は地球軌道要素の変化による日射量の増大とされている。しかし、日射量のピークは 9000 年前であり、7000 年前の海進と異なる。近年の地球温暖化の議論では、過去の温暖化の例として、小説などでもしばしば取り上げられている。

Google 検索「弥生海退」では、簡単な解説は見つからなかった。

「弥生の小海退の海水準低下レベルの測定」、田辺 晋(産総研)・堀 和明(名古屋大)、(国土地理協会第13回学術研究助成(平成25年度)報告書)の冒頭に

「弥生の小海退」とは3~2千年前に現在よりも海水準が2mほど低下したとされる現象である。この現象は、1960年代に豊川平野(井関, 1963)や佐賀平野(有明海研究グループ, 1965), 富山湾岸(藤井, 1965)において、弥生時代の遺跡や埋没林が現在の海水準よりも下位に発見されたことを契機に提唱されるようになった。

と書かれている。

「弥生の小海退」の海水準低下レベルの測定、田辺 晋(産総研)・堀 和明(名古屋大)、(国土地理協会第13回学術研究助成(平成25年度)報告書)の冒頭に <http://www.kokudo.or.jp/grant/pdf/h25/tanabe.pdf>

「弥生の小海退」とは3~2千年前に現在よりも海水準が2mほど低下したとされる現象である。この現象は、1960年代に豊川平野(井関, 1963)や佐賀平野(有明海研究グループ, 1965), 富山湾岸(藤井, 1965)において、弥生時代の遺跡や埋没林が現在の海水準よりも下位に発見されたことを契機に提唱されるようになった。

と書かれている。

Wikipedia「平安海進」では

平安海進とは、8世紀から12世紀にかけて発生した大規模な海水準の上昇(海進現象)のこと。ロットネスト海進とも呼ばれているが、日本における当該時期が平安時代と重なるためにこの名称が用いられている。

日本においても平安海進の影響は大きく、特に縄文海進の時にも大規模な海進が生じた関東地方ではそれが顕著であった。例えば、戸籍の一部が残されていることで知られている下総国葛飾郡大嶋郷は現在の東京都葛飾区及び江戸川区の太日川(江戸川)の自然堤防及びその周辺にあったと推定され、現地では大嶋郷の集落の一部とみられる遺跡(葛飾区の新宿町遺跡など)が発見されているが、8世紀まで順調に発展してきた集落が9世紀に入ると突然姿を消している。それを裏付けるかのように承平年間に著された和名類聚抄の郷名の一覧からは大嶋郷の名前は姿を消している。こうした変化は海進によって現在の東京低地(東京都の下町地域の低地)への大規模な海水の浸水・荒廃化をもたらしたことが原因と考えられ、また周辺地域の陸路・水路の交通路や交易圏の動向にも大きな影響を与えたと考えられている。しかし一方で、同地域の江戸川沿いの海拔は比較的高く、0.5メートルほどの海進では水没しない地域が大半であるため、大嶋郷の荒廃化について原因は定かではない。

以上から、1章で“縄文海進は約6,500年前-約6,000年前にピークを迎え、ピーク時の海面は現在より約5m高く、気候は現在より温暖・湿潤で平均気温が1-2℃高かった。このピークは縄文前期になる。

弥生時代になる 3~2 千年前に-2m に下がることから、4000 年の間に海水面は 7m ほど下がったことになる。後期は現在に近いものかもしれない。

11 世紀から 12 世紀にかけて 1m ほど海水面が上昇した。現在、地球温暖化がさげばれ、脱炭素が言われているが、これほどの海水面の上昇は報告されていないし、11 世紀から 12 世紀にかけて現在より石炭・石油を消費されていたとは考えられない。

以上を表にしてみる。

表 1.4. 海水面の変動

縄文海進 (ピーク)	6,500~6,000	+5m	+1-2°C
弥生海退 (期間)	3,000~2,000	-2m	
	2000 年前=紀元		
	8 世紀初頭	-1m	1,300 年前初頭
	10 世紀初頭	0m	1,100 年前初頭
平安海進	11 世紀初頭	-0.5m	1,000 年前前半
	12 世紀初頭	+0.5m	900 年前初頭。
		400 年で+1.5m	100 年で 50cm 上下

‘正史を彷徨う’では取り挙げなかった平安海進で、海水面が 400 年間で 1.5m 上昇した。平均すれば、100 年で 0.4m 弱である。また、100 年で 0.5m ほど上下している。

これから、紀元後 8 世紀までの海水面は現在の海水面よりもマイナスであったと考えられる。

‘石仏あれこれ’ B2 仏教の成立 において惰性で扱った四大文明は 4000 年前に形成された。

縄文海進と弥生海退共に、上の表の期間書かれている海水面が維持されたとして、進める。とすれば、縄文海進のピークの終わり 6,000 年前から弥生海退始め 3,000 年前の 3000 年の間に 7m 海水面が低下したことになる。100 年で 0.2m 強となる。

‘石仏あれこれ’ B2 で作成した ‘縄文海進と〇〇’ では色別標高図の空切り値として、5, 10, 15, 20, 30, 130 を用いた。今の時点では

3, 5, 10, 15, 20, 30

を用いている。

ここで-2m の等高線はどんななものかと地理院自分で作る等高線地図で-2を試みたが、海面下は何も描かれなかった。地理院の管轄は海水面より上であろうと理解した。海を扱うのは海上保安庁ということで、同庁ウェブ・サイトを眺めたが見つけられなかった。

1.6. 河内湖

‘正史を彷徨う’ 12 章で河内湖の古墳時代の海水面を現在の海水面より+4m とした。これは、‘正史を彷徨う’ 図 V03 河内湖と図 V07 Flood Maps 大阪の比較より得たものである。この海水面の上昇は、海進・海退では説明できず、淀川・大和川による沖積によるものであろう。

[「もう一つの白山\(通水編\)」](#) 白山甚之助谷地すべり対策排水トンネル工事という記録を見た。白山の山頂から流れる雪解け水による地滑り対策として、沢の水を隣の沢に流すトンネルを造る話である。

この地滑りによる土砂が、手取川の加工に加賀平野を形成したのであろう。また、護岸工事が進んだ結果、鳥取砂丘や浜松の砂丘がやせてきたという話も聞いた。

前稿では、縄文時代に起きた海進が徐々に後退し、4-5 世紀に現在の海水面より+4m になったと思っていた。引用した文を少し注意して読めば、これは間違っていた。単純な凡ミスである。

幸い、縄文海進そのものは直接用いてなかった。この+4m という数値は、Flood Maps で 1m きざみで作成したもののうちから、図 1.1 左い近いものということで得た。

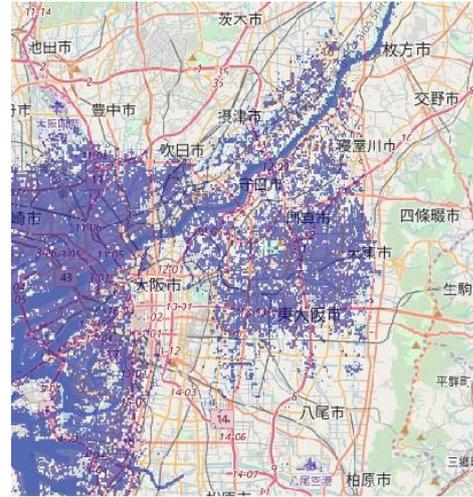
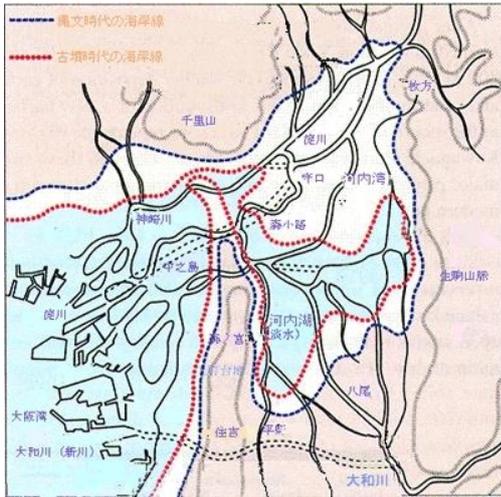


図 1.1. 河内湖（前稿 図 V03）FLOOD MAPS 大阪+4M（前稿 図 V07）

この推定に用いた Flood Maps に触れておく。Flood は洪水であり、現在の海水面を上げたら海岸線はどうかが見られるものである。

「[Flood Maps](#)」で利用することができ、「[海面上昇による浸水をシミュレートできる Flood Maps](#)」に解説記事がある。

国土地理院の地図を見ていると、+印の標高が小数点 1 桁で表示されている。これを緯度経度に変更することも可能である。マークする地点の緯度経度を得ることができるならば、正確な位置決めができることになる。

自分で作る色別標高図で、現在できるのは、6 つの値を指定して、7 色の色分けをすることである。問題点と区切り値の設定が適切ならば、十

分とも思われる。むしろ、これで間に合うように問題を整理することのほうが大事かもしれない。

Flood Maps との比較では、区切り値の設定が1から6に増え、小数点1位も指定できることから、より詳細な結果が得られることが期待される。また、図1.1に近いものが得られるかも気になる。

図1.2と同じ所の色別標高図を作ってみた。

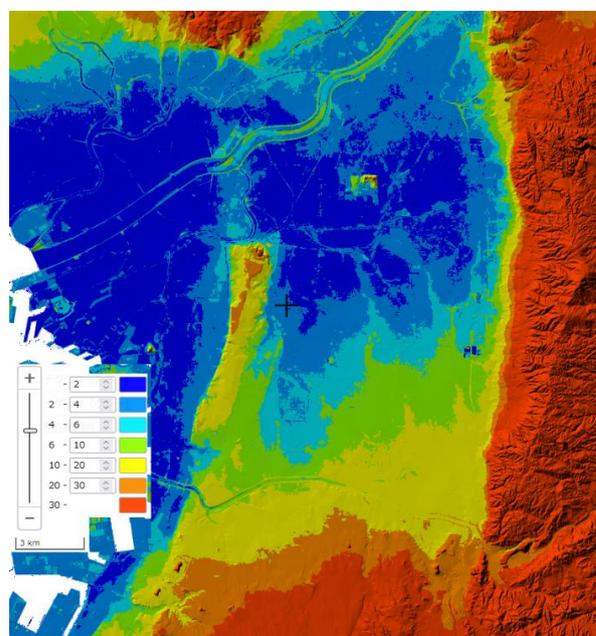
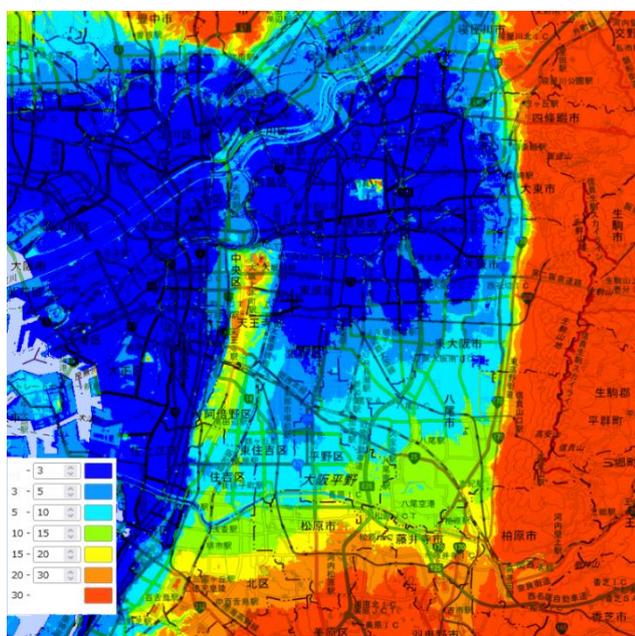


図 1.2. 色別標高図 河内湖

左右の差は 20m 以下の区切り値を変えたことと、右は地名表記を外したことである。なお、左の区切り値は 3, 5, 10, 15, 20, 30 で、右は 2, 4, 6, 10, 20, 30 である。

図 1.1 の河内湖に近いと思われるのは Flood Maps の+4m としたが、図 1.3 にも見られると言えないことはない。

次の図 1.3 は、左は区切り値を 1, 2, 3, 4, 5, 6 とし、右は 2, 4, 5, 8, 16, 30 としたものである。区切りを低地帯で小刻みに設定することにより、河内湖に関して何かを得られることを期待したことによる。

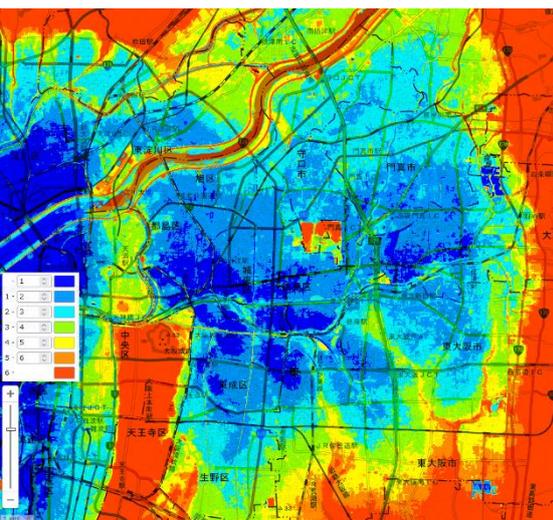
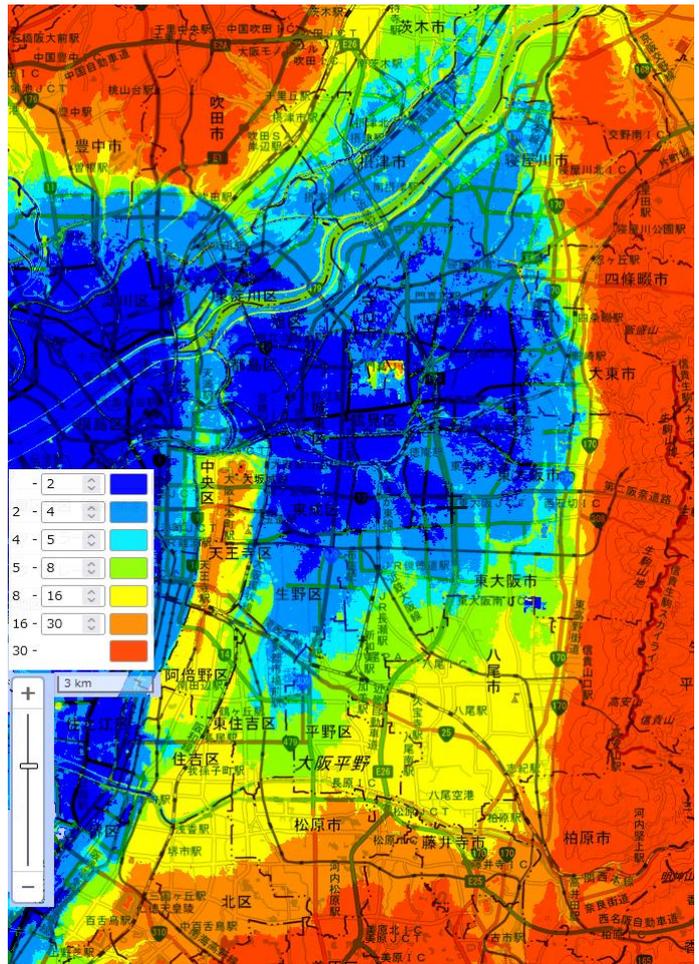


図 1.3. 色別標高図 河内湖（拡大）

図 1.3 左図で、中央のオレンジの島に見える部分は鶴見緑地である。右上から左中央に走っている帯状のものは淀川である。これは両端が細いオレンジの線で、中の中央にオレンジと黒の混じった帯状もの、間が黄色またはみどりとなっている。オレンジの線は堤防と思えば自然である。しかし、中央部がオレンジになるのはバグではないかと思える。

また、青い部分は左に5つが繋がっていて、右に1つ単独で見られる。くすんだ青と緑の間の線(+4m)を結べば図 1.1 に似た図形が得られる。

これから、左図の 2, 4, 5 をいかし、上を 8, 16, 30 としたものが右図である。

ここで、右図を見て思いつくことを挙げていく。

まず目につくのは、右下の黄色部分に見られる扇状地である。この要の位置に柏原市と河内国分寺があり、北側には古市古墳群がある。

この黄色の帯の設定は 8m~16m であり、古代においてはこの辺りが安全な通行の最低限の高度と考えている。

黄色とくすんだオレンジの境界線(16m)の最西端辺りに塚がある。

堺の北側には住吉大社があり、東には百舌鳥古墳がる。

遣隋使の船はどこから出航したか。難波からか筑紫で乗り換えたかが考えられる。

これらの船が河内湖(大和川)を遡れたか疑問である。

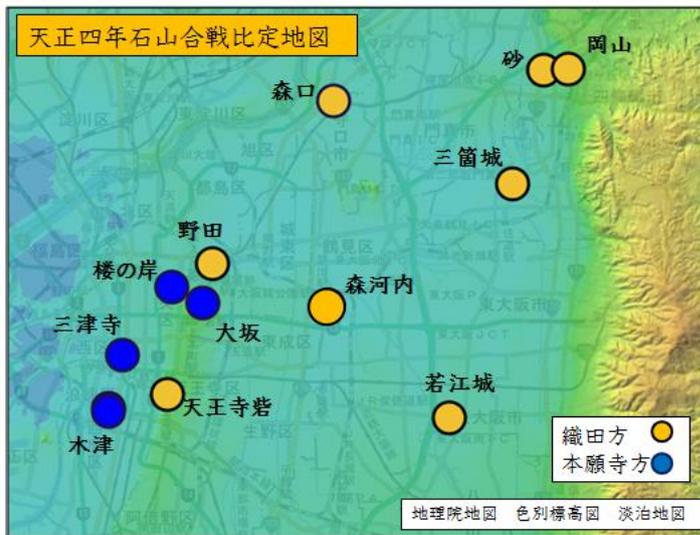
「淀川三十石船今昔」 <https://www.kyoto-wel.com/yomoyama/yomoyama10/059/059.htm>

徳川の初期、世相の安定とともに淀川で結ばれていた伏見・大阪間の交通機関として旅客専用の船‘三十石船’が登場します。米を三十石積めることから三十石船と呼ばれ、別名を過書船とも云われていました。

全長五十六尺(約 17 疋)幅八尺三寸(約 2.5 疋)乗客定員 28 人~30 人、船頭は当初 4 人と決められていましたが、幕末には‘早舟三十石船’が現れ船頭も 4・5 人~5・6 人になり、上り下り共時間が短縮されました。

大阪湾沿岸に港が造られたのではないか。住吉大社から堺が候補と考える。時期としては、遣隋使派遣の前辺りではないか。

Wikipedia「堺」では“中世に貿易港として発展し、栄華を極めた。三津七湊。戦国時代には環濠都市となり会合衆と呼ばれる有力商人たちにより自治的な都市運営が行われた”と書かれている。境と京都を結ぶ陸路は黄色の帯を通っていたのではないか。



次の地図である。

図 1.4. 石山合戦比定地図

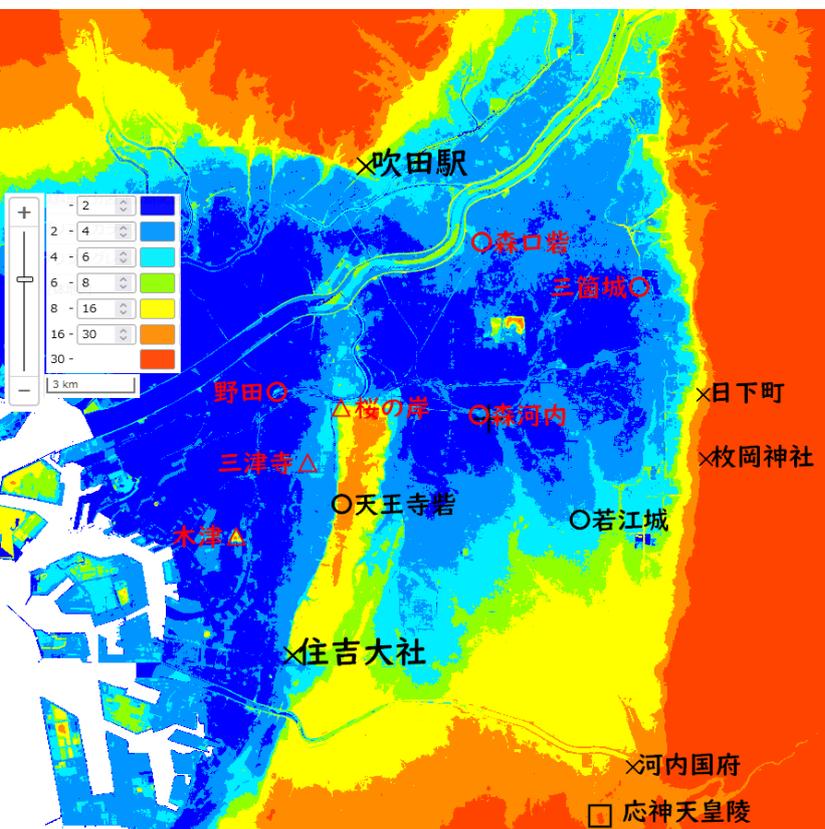


図 1.5. 石山合戦比定地図 (色別標高図)

戦国を歩こう >

「[石山合戦比定地図](#)」

という地図を見つけた。

この地図の部分の色別標高図で作成したのが

右上の岡山と砂の砦の位置は特定でき

なかった。

中央やや左下に見える丸い部分が大阪城である。

これと天王寺砦はオレンジ色の部分(16m以上)にあり、桜の岸は黄色(8m~16m)にあり、若江城は緑(4m~5m)にある。他はくす

んだ青(2m~4m)の地帯にあるが、多くはその緑や黄の部分にある。なお○と○は織田方、△は本願寺方のものである。

ここで、鶴見緑地には城砦が無いことが気になるが、開戦時には圧倒的に水軍で劣る織田方は城砦を作ることも維持することもできなかったのではないかと考えている。

くすんだ青の部分は西を除き、コの字型に拡がり、広さは北南東の順になっている。江戸時代以前の大和川は河内湖を南東から北西に向かって流れていたことを考慮すれば、北は淀川南は大和川による沖積作用によるものとすれば理解できる。

信長の居城であった、清州城と安土城は湖沼地帯の小高い所に造られている。膳所城や後に造られた彦根城も同様である。織田方の砦もまた同様に建てられたかもしれない。

石山本願寺の攻略は、西国への航路と堺の確保のためといわれ、これは確かであると思う。京都と堺を結ぶ陸路は、図 1.5 の右上から緑の地帯を通過していたと思われる。現在の道路では、大和川までは第二京阪から近畿自動車道にを通り、松原 JCT から西進するルートに近い。両道の門真 JCT は鶴見緑地のすぐ東に在る。

ちなみに、西国街道は図 1.5 の黄色の部分を南下し吹田市の北部を通過していた。現在では国道 171 号線から中国高速道に相当する。

ここで本誌の誌名 ‘百万遍’ 交差点周辺の色別標高図を掲げておく。

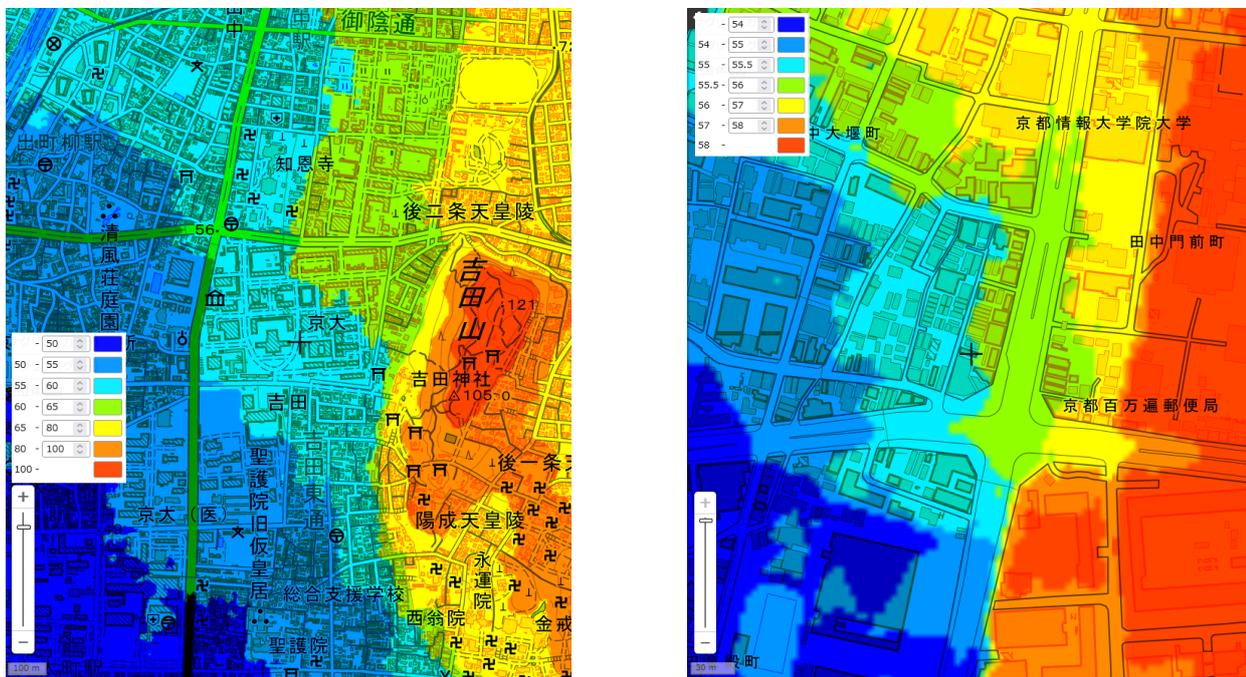


図 1.6. 色別標高図 百万遍交差点

区切り値は、左は 50, 55, 60, 65, 80, 100 で、右は 54, 55, 55.5, 56, 57, 58 である。

この図で地名表記を外したら、標高図と思う人はいるだろうが、位置を言い当てられる人はいないであろう。一方、図 1.2 右を見て大阪という人はかなりいるのではないかと思う。

おわりに

1990年頃から遺跡の発掘が数多くなされている。これらの多くは、高速道路や幹線道路の建設と付随する周辺地域の開発に伴う発掘調査によるものと思っている。これに関する政治経済のトピックと遺跡発掘の記事のうち印象に残っているものを挙げていく。記憶にはないものの幾つかも追加した。

- 1955年 愛知用水公団設立 1961年 完成
- 1958年 一万円紙幣発行開始日
- 1960年 池田勇人総理大臣 所得倍増計画
 1961年からの10年間に実質国民総生産を26兆円にまで倍増
- 1962年 首都高速道路 京橋-芝浦間が供用
- 1963年 ケネディ暗殺（現地時間12時30分：日本22時30分）
- 1964年 東京オリンピック
- 1965年 佐久間周波数変換所
- 1967年 高速国道高規格幹線道路網計画の
- 1967年 古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法（古都保存法）
- 1970年 全国新幹線鉄道整備法
- 1972年 高松塚古墳発掘調査開始 『アサヒグラフ』4月14号
- 1972年 田中角栄総理大臣 日本列島改造論
- 1973年 円変動相場制移行
- 1976年 国土利用計画
- 1984年 一万円紙幣福沢諭吉に
- 1986年 吉野ヶ里遺跡の発掘調査によって発見された
- 1988年から1989年 ふるさと創生事業（昭和63年から平成元年）
 各市区町村に対し地域振興のために1億円を交付した政策
 正式名称は 自ら考え自ら行う地域づくり事業
- 1992年 三内丸山遺跡本格的な調査開始
 県営野球場を建設する事前調査としてから行われた。

幾つかのものは「プロジェクト X～挑戦者たち～」NHK 総合テレビにて
2000年3月28日から2005年12月28日まで放映されたドキュメンタリー番組
で取り挙げられている。